

国語国文学会だより



No. 28

2003. 3

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十四年度秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十四年度秋季大会を十一月三十日(土)、午前の部を香雪館二〇一教室及び午後の部を八十年館八五一教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表) 十時～十二時
近世語における「ござる」「候ふ」

—近松浄瑠璃を中心に—

横光利一と上海
—東西文明の衝突と融合への一視点—

◆午後の部(公開講演会) 十三時～十六時
オーストラリアの中等教育機関における「日本事情」教育
—本学博士課程後期二年次 黄姣婁氏

◆午後の部(公開講演会) 十三時～十六時
「敬語の意味論—敬語のしくみ・意味のしくみ—」
—本学助教 藤原浩史氏

「明治天皇とその時代」

懇親会 十六時半～十八時
ドナルド・キーン氏 於 ウイミン

ドナルド・キーン氏による公開講演会は、学生の強い希望で実現し、多数の出席者が会場を埋め、大変興味深いものでした。また懇親会では乾杯までお付き合いいただきました。

講演要旨

「明治天皇とその時代」

ドナルド・キーン

〔時代〕

明治天皇は一八五二年、鎖国時代に生まれた。この鎖国について多くの日本人は、苛酷であった戦国時代が終わり、治安が良くなったと徳川家に感謝し、良い制度でずっと続くと思っていた。芭蕉も「あらたふと青葉若葉の日の光」と日光で詠んでいる。日光は徳川家のおかげで青葉も光り輝くと称えているのである。

外国人からも、鎖国をしていた日本は高く評価されている。当時の出島に貿易商のオランダ人と共に来っていたドイツ人医師ケフラーは、やはり戦争がないという理由で日本の制度を誉め、自給自足ができていたので鎖国が可能だと分析している。それから百年ほど後、同じく医師でスウェーデン人のツルネンは、植物学の知識もあり、日本の植物をヨーロッパに持ち帰ったが、幕府の体制にも感心し、スウェーデン王に幕府を作るよう勧めたほどである。

もちろん現状に満足していない日本人もいた。杉田玄白は蘭学者は西洋医学やオランダ語を学び、司馬江漢はオランダ美術から遠近法による立体的な表現を浮世絵に取り入れ、渡辺崋山らに影響を与えた。本多利明は多種多数の文字を使う日本語を非能率的だとし、アルファベット二十六文字を利用するべきと述べている。

鎖国には良くない点もあった。第一に、言論の

自由がない。渡辺華山を例にとれば、ある嫌疑（これは後に無実と認められた）の調査中、国防について書いたものを発見され、内容的には全く問題がないにも拘らず、個人の意見を述べること自体が禁じられていたため、無期限の蟄居を命じられた後、自刃している。第二に、自給自足により鎖国が成立しているとされたが、実際には食料は不足気味で、飢饉の時には餓死者も多数でた。もしも、近隣諸国より穀物等の輸入があれば、死者の数を減らせた筈である。第三に、他国の文化との接触が無く、刺激を受けられない。鎖国以前には室町末期から桃山時代にかけて、スペインやポルトガル人と交流があり、彼らが本国に宛てた手紙によれば、キリスト教を最も大切に考えていた宣教師たちから見て日本人は、キリスト教を信仰していない点では西洋より劣っているが、その他の文化が十分補っている、室内の清潔さなども例にあげ、大変すばらしいと認めていた。しかし日本が鎖国している間に、ヨーロッパでは産業革命が起こり、自然科学の研究も進んだ。一方、日本は幕末に至り文学は衰退して、小説は同じようなテーマでの焼き直しとなり、俳句も感心できるようなものは無く、和歌は地方では良い作品も生まれたが、中央はだめになっていった。歌舞伎だけは黙阿弥ひとりのおかげで発展した。

その鎖国も、西洋で汽船が作られ、季節や風の影響を受けずいつでもアジアまで来られるようになり、石炭や水の補給を日本でさせるよう要求されることにより、見直しを余儀無くされた。明

治天皇の父である孝明天皇に、政治的なことを知らせる人はいなかったが、外国船の話は耳に入った。天皇には外国に対する知識も興味もなかったが、ひとりでも外国人に日本の地を踏ませることは、祖先に対する冒瀆であると考えていた。天皇に幕府を倒すつもりは経済的な面からもなく、攘夷主義者だったと言える。孝明天皇は三十六才で亡くなったが（暗殺、病死両説有り）、もし、もっと長生きしていたら、明治維新はあっただろうか。



〔明治天皇の人物像〕

明治天皇は一五才で即位し、望んでではないが、そうせざるを得ないと判断し外国人外交官に謁見を許した。政権を担うこととなった明治天皇は五ヶ条の御誓文を發布し、同時に宸翰（書簡）が発表された。それは、祖先に恥をかかせないよう外国と対するにはどうすれば良いか、もし国民が幸福を得られなければ全て自分（天皇）の責任であり、自分は全力で努力するので、国民も助けて欲しいといった内容であった。孝明天皇なら、有り得ないものである。明治天皇の考え方は御製の和歌にも表われている。

「萬代にうごかぬものはいにしへの

聖のみよのおきてなりけり」

と詠まれたつ、

「すすみゆく世におくれなばかひあらじ

文の林はわけつくすとも」

とし、伝統を重んじながらも近代文化を取り入れなければ生き残れないことも承知し、外国のものについては

「外國の草木のなへもわが園の

うちにあつめてみるぞたのしき」とされている。明治天皇の考え方の基本が見える。

明治天皇が、亡くなってすぐ後、外交官の牧野伸顯は、天皇には「私」の側面がなく、住居は質素で旅行も国家の為、物を買いたい求めるのは殖産興業、美術保護の為であったと記している。巡幸の目的は天皇の教育にあり、明治天皇は伊勢神宮、

富士山、そして歴代天皇の中で初めて海を見、自国を知ることができた。

明治天皇は典医を近づけず、齒の治療もしたことがなかった。事実医者嫌いであったのだが、病氣であることを認めないのは、義務感が強かったからとも考えられる。憲法制定の場に、発言しなくても常に出席し、とかく雑談を始めがちな軍人達が真剣に話し合うようにさせ、日清戦争の際には総司令部を広島に置き、第一線の兵士のことを考え自らも粗末な部屋で戦場近くに居るようにした。

最後の出席の場は東京帝大卒業式で、そこでは天皇は何もしなかった。それは何かをすることが目的ではなく、いつでも天皇が「その場に居る」ことこそが重要だったからである。

靴も修理し、軍服に縫を当て、火災で消失した宮殿の建設も対外的な観点から十六年後にやっと許すなど、大変儉約家であった。食べ物は刺身が苦手、川魚などの京料理と共に、洋食、アイスクリームを好んだ。

明治天皇は皇居の外に出て行かう演習には熱心だったが、戦争は好まなかった。これは西南戦争で日本人同士が戦い、親愛の情を感じていた西郷隆盛を失うという辛い経験があったからであろう。戦争をできるだけ避けたいという思いは、日清戦争の宣戦布告を祖先の神々や父の墓に報告したがいなかった理由からも分かる。「今回の戦争は朕素より不本意なり、閣臣等戦争の已むべからずを奏するに依り、之を許したるのみ、之を神宮及び先帝陵に奉告するは朕甚だ苦しむ。」と述べたと

される。しかしその翌朝までに、既に戦争は避けられないと判断し、それ以後天皇は戦いに迷いを見せることはなかった。日露戦争は日清戦争と比較できないほど凄惨を極め、旅順では多くの戦死者を出した。ようやく勝利の報告を受けた際、周囲の予想に反し天皇は嬉しそうにするどころか表情を全く変えず、祖国に対する忠誠を示し続けた敵のステッセル將軍を称え、彼の武人としての名誉を保たせるよう、山県有朋に命じたとされる。

明治天皇は明治時代の日本人の美徳のモデルになったと言える。質素であり、義務感が強く、克己心があり、あらゆる困難に耐えられる。それはそのまま明治時代の日本人に必要な美徳であった。

私自身、明治天皇は実にすばらしい人間であつたと思う。

「敬語の意味論

「敬意のしくみ・意味のしくみ」

本学助教授 藤原浩史

「敬語」とは、「話し手」の敬意を表示する言語形式です。現代の標準的な日本語は、文法・語彙の両面で、対人的な認識を表示しますが、これは奈良・平安時代にまでさかのぼります。例えば、「聞く」に「聞き・給ふ」「聞か・せ・給ふ」と補助動詞・助動詞をつけると尊敬語ができます。これを、「文法的敬語形式」と呼んでおきます。また、「聞

こす」「聞こし・召す」のように語形を変えることによって尊敬語を作ることができます。これを「語彙的敬語形式」と呼びます。両者とも、動作をする人に「敬意」を付加することができます。ただ、「同じ意味」の表現が、二つも用意されているのはムダのようにも見えます。両方ともよく使われる表現なので、本当は、何らかの違いがあるはずですが、おそらく、「敬意の質」と「単語の意味」のどちらか、あるいは両方に、違いがあるのでしよう。敬語を意味論的に解いてみましょう。

現代の敬語形式でもヘンな意味の敬語形式があります。「先生が、教室にいらつしやる」という文は、これだけでは「いる」のか「行く」のか「来る」のか判りません。「いらつしやる」の意味は、三者が「束」になつて作られているのか、それとも三者に共通点する「素」だけをもっているのか、興味深いところです。またこの例を「いる」の意味と仮定すると、それは「おられる」と敬意の質が同じかどうか、おもしろいところです。今日は、平安時代の敬語の事例を検討しますが、現代でも同じ問題が残っていることに留意してください。

一番目の事例として「聞く」の敬語形式をとりあげます。平安時代の和文資料で、語彙的敬語形式「聞し召す」と文法的敬語形式「聞かせ給ふ聞き給ふ」を調査しますと、使われる人物について、後者の中では上下がありますが、「聞し召す」との間に上下関係はありません。この二つは敬意の段階では対立しません。どんな気持ちで両者を使い分けるのか、『源氏物語』宇治十帖・会話文で

の使用状況から読み解いてみましょう。「聞き召す」の場合、動作主体は話者にとつて直接の主人に限られます。単なる「うやまい」ではなく、「支配者」と認識したことを表示します。「聞き給ふ」はその特徴をもちませんので、「敬意の質」が異なっています。

支配者であるにも関わらず「聞き召す」が使用されていない事例もあります。しかし、どの用例も聞いた内容について、しっかりと考えています。「聞く」は本来「①情報を聴覚で受容すること」「②受容した情報を、理解し認識すること」の二つの動作過程から成り立っていますので、文法的敬語はそれを継承します。しかし、「聞き召す」は主体に「支配者属性」を付加することと連動して②のメンタルな動作過程を欠落させて、フィジカルな動作のみの表現となっております。二番目の事例として「見る」の敬語形式である「御覧す」と「見給ふ」を比較します。やはり、「御覧す」は主体に「支配者属性」を付加し、メンタルな動作過程を欠落させて「①情報を視覚で受容すること」だけを意味する、フィジカルな動作の表現となっております。「聴覚」「視覚」が形式化した「飲食」を表現する用例では「御覧す」と「聞き召す」はほぼ同義となっております。

語彙的な敬語は、社会的な関係の中での行為を取り上げるため、既存の動詞とは意味のしくみが変っているものが数多く見られます。一見「多義的」であったり、意味が「空洞化」しているように見えるものがありますが、敬語表現の生成にあ

たつて、コトバの「かたち」だけではなく、「意味のしくみ」に手が加わった結果であると考えられます。

敬語動詞にとどまらず「給ふ（四段）」がどのよう、平安中期以降の「主体尊敬だけを表す補助動詞」になっていったか、その歴史を調べると、何段階にも意味のしくみに形式化が生じていることがわかります。

このように敬語を「意味論」的に考察すると、われわれが学校で習った文法や敬語とは全然ちがう世界が見えることを紹介しました。

報告

文学散歩 雑司が谷界隈を歩く

二〇〇二年のマスコミ界を賑わしたサンカ小説の三角寛、テレビドラマでブームを起こした「真珠夫人」の菊池寛。二人の寛を追ってのテーマで、十月十九日（土）、大衆文学の世界にしばし遊びました。参加者九名。

講師は、若い研究者藤木直美氏（院三十一回）。お話を先だつて、創立者成瀬先生の墓前に、一同お花と校歌合唱を捧げ、墓地に隣接する「豊島区立雑司が谷旧宣教師館」を見学。

昼食は「寛」（旧三角寛邸）で。責任者三浦庸子氏（三角寛の孫）のご好意で、戦災を免れた邸内の一部を自由に見学。なかでも、サンカ小説連載時、小説同様に人気を集めたという宮本三郎画伯のさしえて仕立てられた屏風。若き日の情熱あふれ

る貴重な作品を拝見できた事は望外の幸でした。

藤木氏作成の八枚にわたるレジュメは、第一章「山窩」小説家・三角寛／第二章「フェミニスト」菊池寛―「真珠夫人」リバイバル現象を端緒として―と、二人の寛に関して数多の資料を駆使した労作で、多くの聴衆を得る場になかった発表が惜しまれる内容。とりわけ、『父・三角寛 サンカ小説家の素顔』（現代書館／98・9）における著者三浦寛子の、父を冷静な目で描く知的な姿勢に感動した、その藤木氏の言葉が印象的でした。

三角邸から数百メートルの菊池寛旧邸は、現在マンションが建てられ、プレートにその存在を示すのみ。

文学散歩の最後に訪れたのは、東京カテドラル大聖堂の前の「講談社野間記念館」。副館長小田島雅和氏より「旧野間邸を改築した」館の成立などのご説明を受けた後、鏑木清方、松岡映丘、速水御舟、横山大観、小林古径……「大正・昭和初期の東京画壇」展と、緑あふれる庭園をゆっくり観賞しました。

小田島氏、三浦氏、藤木氏、その他多くの方々のご好意を受けた有意義な半日でした。

（新妻佳珠子 記）

二〇〇三年三月一日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会

〒一〇二・八六八

東京都文京区目白台三二・八・一

日本女子大学 日本文学科内